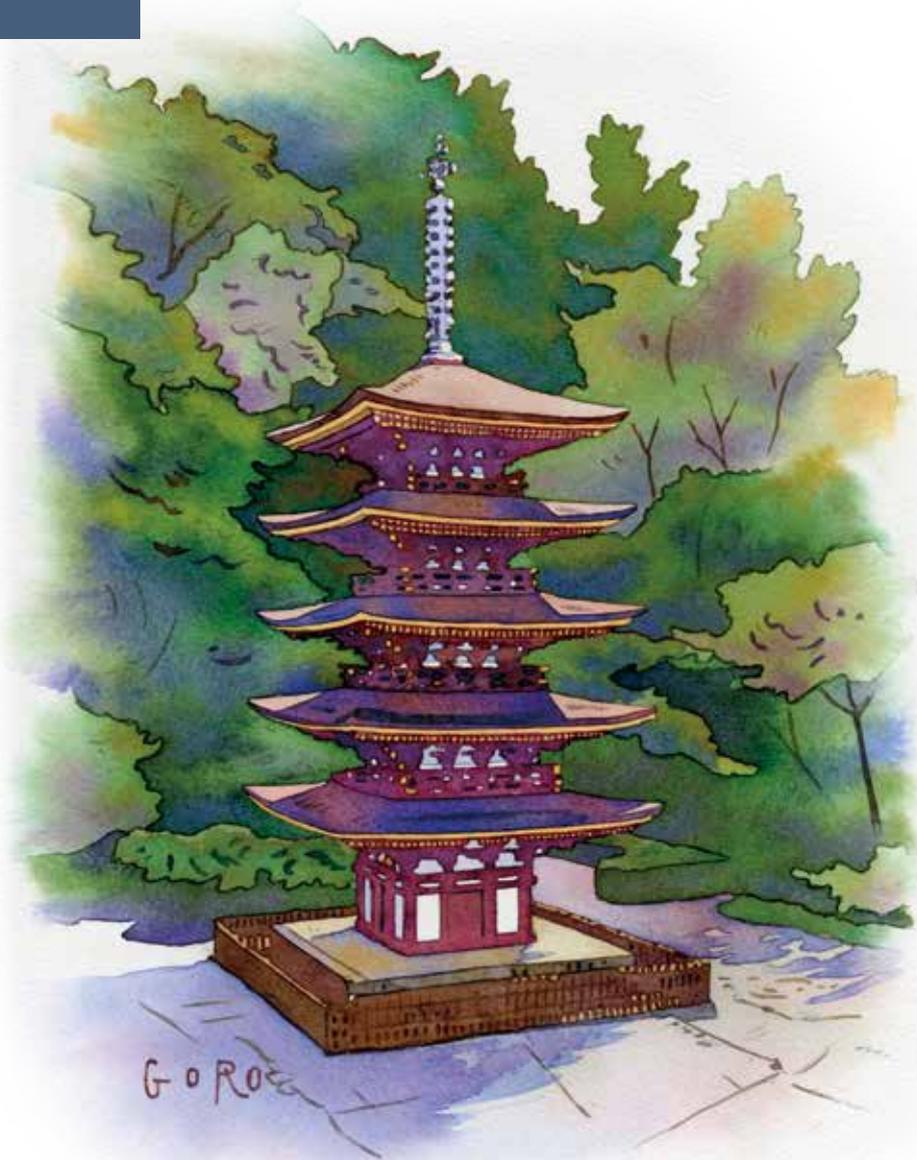


ちいさな 建設

室生寺国宝五重塔



時を超える 可憐な立ち姿

奈良県の北東部、宇陀市の三重県境寄りの山中に建つ室生寺。平安時代初期から鎌倉時代に建立された初期の山岳寺院で、一帯には杉と檜の大木、巨木が林立。麓から仁王門を潜り、弥勒堂、金堂へ、更に本堂へ急勾配の自然石の石段が続き、いかにも体力が試される。修験道の間から真言寺院となり、高野山に替わって女性が参詣できる寺として、江戸時代に女人高野と呼ばれるようになった。

本堂の西側へ出ると、誰もが息をのむ出合いがある。五〇段ほどの石段の上に瀟洒で軽やかな姿の五重塔が立ち、空に向かって立っている。寺の創建当時の建立で、一九五一年に国宝指定。高さ一六・一メートル。日本で屋外最小の塔だが特別な存在感はサイズを超える。緩やかな勾配の檜皮葺き、最上部の装飾が宝瓶と天蓋というのも珍しいという。一九九八年九月の台風で杉の倒木により、五層の屋根が隅棟から大破し、多くの人が胸を傷めたが、伝統技術を継承する関係者の知恵と手、信者の協力で二年で修復され、今に受け継がれている。

アクセス バス停「室生寺」から歩いて5分ほど